

東京大学大学院総合文化研究科 グローバル地域研究機構中東地域研究センター  
[スルタン・カブス・グローバル中東研究寄付講座]



# UTCMES ニュースレター

## VOL.27 2025

1. 学びの寄港地 ..... 1	3. 駒場中東セミナー開催報告 ..... 10
(1) 阿部 想 ..... 1	4. パフワーン文庫便り ..... 11
(2) 落合 美月 ..... 3	5. スタッフ・発行者情報 ..... 12
2. この一品——私の研究モノ語り ..... 6	
(1) 澤 裕章 ..... 6	
(2) 有坂 日向子 ..... 8	

## 1. 学びの寄港地

### (1) 私と中東をつなぐ旅：サウジアラビア、UAE、イランを訪れて

東京大学教養学部教養学科  
文化人類学コース 4年

阿部 想

#### 中東との出会い：サウジアラビア

私と中東の出会いは、学部2年の春に訪れたサウジアラビアから始まる。大学の海外渡航プログラムの中に「サウジアラビア」の文字を見留めた私は、せっかくだから、一生行くことのなさそうな国に行ってみようというなんとも失礼な理由で応募した。しかしこの選択が、私を底知れない魅力を持つ中東の世界へと導いてくれたのである。

私が訪れたのは、サウジアラビアの首都・リヤドにある、プリンセス・ヌーラ大学（PNU）だ。PNUは、「男性40人分の頭脳を持つ」と言われたサウジアラビアの伝説の王女・ヌーラの名前を冠した、世界最大の女子大だ。学生数は約

6万人で、敷地面積は本郷キャンパスの約30倍の1300ヘクタール。大学内には14の駅があり、自動運転のメトロが走っている様子には圧倒された。私はこの大学の学生寮に約1週間滞在し、大学生活を堪能した。



PNUの学生寮

#### ニカブを外した女性たち

サウジアラビアの女子大に女性として滞在することの面白さの一つに、ニカブを外した姿の同世代の女性たちと交流できることがある。大学の建物内は男性が

入ることのできるエリアが厳しく制限されており、各棟のエントランスには女性管理人が常駐しているため、女性たちは男性の目を気にすることなく安心して大学構内を歩くことができる。そのため、ニカブをしている女性はほとんどおらず、学生たちは皆綺麗にウェーブした髪の毛をなびかせて大学を闊歩していた（たまに、ベリーショート姿のスタイリッシュな女性もいた）。服装もラフな格好をしている人が多く、Tシャツにロングパンツを合わせ、その上から、マントのような足まで隠れる長い前開きの上着を羽織るのが定番の服装だった。サウジアラビアというと、全身真っ黒のアバヤにヒジャブとニカブで顔全体を覆った姿の女性たちの姿を思い浮かべていた私は、ニカブの奥の女性たちの素顔を知って、彼女たちとの心の距離もグッと縮まった気がした。

ただし、いくら大学構内は男性の立ち入りを制限しているとは言っても、清掃員の方など構内を出入りしている男性たちも少なくない。そのため、女性たちはいつもヒジャブになるような暗い色のス

カーフを持ち歩き、男性の姿を見かけると、近くにいる人同士「男性の姿を見たよ」などと声を掛け合って、さっとスカーフを顔に巻き付けるのだ。まるで手品のようにあつという間に顔を覆う女性たちの様子に私は舌を巻いた。

#### 寮の一室で

1 週間の滞在の間、私たちは朝から大学でキャンパスツアーや料理教室、アラビア語クラスなど、さまざまなプログラムをこなしつつ、夕方からは市内の観光地に連れて行ってもらうサウジライフを満喫した。夕方から市内観光には、毎回日本語が堪能な現地の学生が付き添ってくれ、一緒に市内を巡りながら私たちはすぐに打ち解けていった。とりわけ仲良くなったある友人は、サウジ最後の夜に私たちを彼女の寮の一室へ招待してくれた。日本の男性アイドルが大好きだという彼女は、独学で学んだとは信じられないほど堪能な日本語を話す。そんな彼女の部屋は日本のアニメキャラクターや日本の風景写真などで可愛らしく飾り付けられていて、パフール（アラブのお香）がほんのりと香る素敵な部屋だった。夜中に押しかけて行った私たちを彼女は暖かく迎え入れてくれ、お手製のクリームパスタと大量のお菓子、そしてアラビックコーヒーでもてなしてくれた。スパイスの効いた独特の香りがするアラビックコーヒーを片手に、私たちはおしゃべりに花を咲かせた。帰り際には、彼女は申し訳なくなるほどの量のお土産を持たせてくれて、笑顔で送り出してくれた。サウジ流のホスピタリティに触れ、スーツケースをパンパンに膨らませた私は、また絶対に中東に帰ってこようという思いを胸に、泣く泣く日本に帰国した。

#### 未来都市国家・UAE の光と影

サウジから帰国して半年後、次に私が飛び立ったのは UAE だ。こちらも東京大学のプログラムを利用して、ドバイとアブダビ、アル・アインの 3 都市を訪れた。UAE で度肝を抜かれたのは、独創的で煌びやかなデザインの建物の数々だ。世界最高の高さを誇るブルジュ・ハ

リファに始まり、つぶれたドーナツ形をした未来博物館、街並みが額縁の中の絵画のように見えるドバイフレーム、アブダビにある完全屋内型テーマパーク・フェラーリ・ワールドなど、まるで SF 映画の世界に迷い込んだように錯覚する建築物の連続なのだ。私たちは、大学の OB でドバイを拠点に建築家として活躍するファディ・ジャブリ氏の案内で、氏が率いるチームが設計した完成したばかりの高層ビルも見学した。高速道路の上を跨ぐようにして、地上 100 メートルの高さで直方体の箱が二つの高層タワーを繋ぐという斬新なデザインの建物は圧巻だった。まさに UAE は、時代の最先端をゆく、未来都市的様相を呈した国なのだ。



夕刻のブルジュ・ハリファ

一方で、UAE のこの大規模開発を支える外国人労働者にも思いを馳せずにはいられなかった。私が UAE を訪れた 9 月初旬は、連日 40 度を超え、湿度も 80 ~ 90% という有様だ。ほんの一瞬外に出ただけで、刺すような強烈な日差しと、息苦しさすら覚える湿った空気に、私は生命の危険すら感じた。しかし、このような過酷な環境下において

も、建設現場を中心に、外で長時間労働に従事する人々が大勢いるのだ。2022 年のカタール・ワールドカップの際に取沙汰されたように、中東諸国では、外国人労働者への人権侵害が問題となっている。UAE においても、労働者のデモやストライキは禁じられており、外国人労働者は脆弱な立場に置かれている。焼け付くような日差しの下で長時間働き続ける彼らのことを考えながら見るドバイの夜景の眩い光は、もはや手放しでは喜ぶことのできない代物だった。

#### 憧れの街・イスファハーンへ

3 度目の中東訪問の行き先はイランだ。実は、イランは私にとって長年憧れの地だった。初めてイランに行きたいと思ったのは高校生の時である。サファヴィー朝の繁栄を表す「イスファハーンは世界の半分」という言葉とともに世界史の教科書に掲載されていたイマーム広場の写真。私はその精巧な青に目を奪われ、以来いつかイスファハーンを訪れたいと憧れ続けてきた。そんな長年の願いを叶えるべく、私は笹川平和財団主催のイラン短期研修に参加して、イランへと旅立った。

イマーム広場のシンボリック的存在であるイマーム・モスクは圧巻の佇まいだった。緑がかった青色のミナレットは、2 本はメッカの方向、2 本は広場の方向を向いて空高くそびえ立っており、快晴の空に映える。1 番大きなドームの真下に辿り着いた私たちに向けて、ツアーガイドの方がクルアーンの一部の暗誦を披露してくれた。時間が止まったかのような静けさを破り、ドーム全体に朗々と響き渡る歌声のような美しい声に、私は感動で身震いした。

イマーム広場は、南側のイマーム・モスク、東側のシャイフ・ロトフオラー・モスク、西側のアリ・カブ宮殿に囲まれるようにして広がっている。実際に訪れてみて最も気に入ったのはこの広場の部分だった。広場は美しく整備されていて、真ん中の大きな噴水を取り囲むようにして可憐な花畑と青々とした芝生が広がり、地元の子どもたちがサッカー

をしたり、大人たちが座っておしゃべりしたりしている。なんとも長閑で平和なこの空間に、私は一瞬で魅了された。

広場の西に佇むアリ・カブ宮殿のテラス部分から眺める広場の様子もまた圧巻だった。右手には壮大なイマーム・モスク、真下をみるとゆったりと過ごす地元の人々で賑わう広場が見え、その奥にはシャイフ・ロトフォッラー・モスクが見える。豪華絢爛ながらも上品さのある青のモスクと、眼下に広がる青々とした芝生と花々、行き交う人々の姿に、かつて「イスファハーンは世界の半分」と評した誰かの言葉がこれほどにも説得力をもつ瞬間はないだろうなどと考えながら、私はうっとりとして広場に入らした。



アリ・カブ宮殿からの眺め

### ヒジャブ着用問題

イラン滞在中、最も気を遣ったのがヒジャブだった。イランでは、外国人も含め女性はヒジャブを着用する義務がある。サウジアラビアやUAEに渡航した際もなるべく肌の露出を抑えた格好を心がけていたが、ヒジャブを常に着用するのは初めてだった。ドーハを飛び立った飛行機がテヘランに着陸すると、それまでヒジャブを着用していなかった女性たちも一斉にスカーフを顔に巻き付け始める。私も慌てて身につけ飛行機を降りるのだが、スーツケースを引っ張っていたり少し小走りになったりするとすぐにヒジャブがずれてくるので面倒臭い。さら

に、食事の時なども気を抜くと布が顔にかかってきて不便に感じた。しかし、慣れればこちらのもの。ヘアピンを使ってスカーフを上手く髪の毛に留めると、ずり落ちてくることもなく快適だった。また、2月の厳しい寒さのイランにおいては、顔の周りを布で覆うことは防寒の意味でも合理的だった。

一方、街中を見渡すと、髪の毛がほとんど露出するほどヒジャブを緩く巻いた女性や、全くヒジャブを身につけていない女性も少なくないのである。聞けば、4年前にヒジャブの着用をめぐる1人の女性が逮捕され、死亡した事件をきっかけに始まった「女性・生命・自由」運動の影響で、ヒジャブを着用しない女性がこの数年で急激に増加したそうだ。10年ほど前までイランに暮らしていたある参加者の話によれば、当時はヒジャブを全く巻かない女性を見かけることはなかったと言う。ヒジャブ着用拒否は、4年前の事件を端に発する女性たちの抵抗の実践として、今では街に溢れ、警察ですら取り締まれないほどにその数は増えており、女性たちが着用を拒否する行為が、まさに4年前の事件を契機とした抵抗の実践として根付いていることに、深い驚きを覚えた。一方で、カーシャーンなどの地方都市では、伝統的な黒のチャドルを身にまとった女性たちの姿も多く見かけた。イランの女性たちが自分自身の望む装いを自由に選べる日が1日も早く訪れることを願いつつ、私はイランを後にした。

### おわりに

今年6月13日に起こったイスラエルによるイランへの大規模な先制攻撃、それに続く両国の交戦、そして22日のアメリカによるイラン核施設への爆撃は、私にとってこれまでにないほど衝撃的なニュースだった。日々伝えられる戦況に、私がイランでお世話になった方々、街角で出会った野良猫たち、市井の人々が無事であるようただただ祈り続けることしかできなかった。その一方で、私自身もまた、このグローバルなシステムの中に巻き込まれ、ときに不正義

に加担しながら豊かな生活を享受しているという事実に、後ろめたさと心苦しさも感じずにはいられなかった。中東という地域にご縁をいただいた者として、そこに暮らす人々の平和と安全のために、どのようなかたちであれ貢献していきたい——その思いをいっそう強くしたことをもって、本稿の締めくくりとさせていただきます。

### (2) 2年間のオマーン生活

東京外国語大学 国際社会学部  
中東地域アラビア語専攻 4年

落合 美月

2023年3月から2025年3月までの2年間、オマーンにある日本大使館で勤務をしながら、首都マスカットで生活をした。

### 在オマーン日本大使館派遣員

著者が応募した「在外公館派遣員」について軽く説明すると、世界各国にある大使館・総領事館等の在外公館に派遣され、日本からの出張者や来訪要人の空港支援、ホテル・車両の手配と管理のほか、現地新聞の翻訳、大使館HPの編集、会議資料作成、備品管理、会計補助など幅広い総務業務を担う（在外公館によって業務内容は異なる）。

在オマーン日本国大使館での具体的な業務内容について、本稿では言及しないが、もし興味があればご検索いただきたい。

### 現地の生活

オマーンはどんな国かと聞かれるたび、必ず言及しているのは気候である。

オマーンは灼熱の国である。入国したのは3月で、それでもやや蒸し暑く感じていたが、現地の人々は「まだまだ序の口で、これからもっと暑くなる」と口をそろえて言っていた。8月になると、気温は日中40～45℃程度、ひどいときには50℃に達することもあり、その意味を身にしみて感じていた。現地の暑さに慣れていなかった当初、日中に10分以上外に出ていると、汗が止まらな

かったため、自由に外を歩くことは困難であり、少しストレスだった。他方で、ショッピングモールやレストランの中では冷房が強力に効いており、建物内は極寒という真逆の状況が生じている。これもまたストレスであった。

そんな酷暑のオマーンに冬がいつ訪れるのかと心待ちにしていたが、11月に入ってもまだ暑かった。夏本番と比べれば確かに気温は和らいでいたが、著者はまだ半袖で過ごしていた。12月に入りやっと、朝や夜は半袖では肌寒いと感じられる気温になった。オマーンの冬は最低気温が18度前後、最高気温は25度前後である。初夏や秋の初めのような、涼しさと暖かさを兼ね備えた気候が好きな著者にとって、オマーンの冬は非常に快適で、まさに理想的な季節といえた。気候が涼しくなることで可能になるのが、自由に外出することである。外を自由に歩けないストレスから解放され、念願だった散歩や徒歩での買い物容易になり、レジャーにも頻繁に出かけられるようになった。

たとえば、オマーンで初めて体験したレジャーはハイキングだった。コースはマスカット郊外の岩山や砂利道、ファラジュ（オマーンの伝統的な灌漑水路）、デーツの木の間を通る道であった。朝7時の冷たい空気と草木の香りが心地よく、自然を五感で堪能することができた。本格的なハイキングというわけではなかったが、自然の中を歩くだけで気分



がリフレッシュされる、貴重な体験であった。

またオマーン生活で重要なのが、車である。当地にはメトロや電車が存在せず、主な移動手段が自家用車かタクシー、あるいは要所を結ぶバスである。著者も通勤のため中古車を購入したが、実はペーパードライバーであり、日本ではほとんど運転した経験がなかった。しかし当地では猛暑のため歩行者が少なく、また首都マスカットは道路が整備されている場所が多いため、比較的初心者にも運転しやすいという印象を受けた。

とはいえ、日本で言うところのあおり運転やウィンカーを出さない車線変更といった強引な運転は多く見られ、交通事故の発生率も日本とは比べものにならないほど高い。かくいう著者も運転を始めて1か月後に、慣れない環状交差点で車との衝突事故を起こした（死傷者なし、保険適用）。勤務先やROP（Royal Oman Police / オマーン王立警察）に大変迷惑をかけたが、今では懐かしい思い出である。

#### 砂漠

最も印象に残っているレジャーは、砂漠泊である。著者は2年間の滞在の間で3回行ったが、アクティビティが大好きなオマーン人の友人に連れて行ってもらった初回が最も印象に残っている。

オマーン東部の内陸に位置するワヒバ砂漠（بدية）は、首都マスカットから車で2時間ほどである。目的のキャンプ地に向かっていると、著者が乗っていた車が砂にタイヤを取られ、スタックしてしまった。砂漠では順調に走行していても、突然タイヤが埋もれてしまうことがあり、ある程度のコツが必要とされるようだ。幸運にも近くにいたオマーン人たちが手を貸してくれ、一緒に車を押し脱出に成功した。

どうにかキャンプ場に到着すると、友人が喜々としてバーベキューの準備を始めたため、著者はテントやキャンプファイアの準備に取り掛かった。準備を始めたのは日没前だったが、太陽が沈むにつれて気温が下がり、風も強くなっていった。

テントの中には砂が入り込み、風で飛ばされそうになっていた。焼いてくれたラクダの肉も野菜もすべてが砂まみれで、胡椒なのか砂なのか判別がつかないまま、じりじりと音を立てながら食べたが、とても美味しく感じられた。

食事を終え、キャンプファイアを囲みながら会話を楽しんでいたとき、空を見上げると満天の星と明るい月が輝いていた（残念ながら写真には収められなかった）。その頃にはすっかり冷え込んでおり、日本から持参したジャンパーやパーカーが初めてオマーンで活躍した。

朝を迎えると、気温は一段と低くなり、朝露によって椅子や靴が濡れていた。砂も水分を含んでおり、触れると泥のような感触があった。それでも、近くの丘に登ってみると、誰の足跡もない美しい砂漠の風景が広がっていた。残念ながら日の出は雲に遮られて見えなかったが、朝焼けと一面に広がる砂漠の眺めはまさに絶景であった。



#### オマーンの桃源郷、ワカン村

オマーンで有名な観光名所の一つ、ワカン村（قرية وکان）もとても印象深く記憶に残っている。

ワカン村は、オマーン北東部の南パルティナ地方にある小さな村である。「オマーンの桃源郷」とも称され、観光客にひそかに人気のスポットとなっている。

最大の特徴は、その自然の美しさにある。ファラジュや段々畑、山羊など、自

然と動物にあふれた環境が広がっている。特に2月ごろにはあんずの花が咲き誇り、可愛らしいピンク色の景色を楽しめる。

村にはカフェやスナックを販売する屋台もあり、観光地としてしっかり機能している。しかし一方で、実際に人々が暮らしている村でもあるため、口バを引く少年や畑仕事をする男性の姿が見られ、彼らの生活を妨げないよう配慮する必要がある。

著者はあんずの花が最も美しく見られるとされる2月に村を訪れた。花は一部散っており、緑が目立ち始めてはいたが、歩きながら、そのかわいらしい花を存分に堪能した。快晴の青空の下、ナツメヤシの木とあんずの花、そして壮大な岩山が一つの絵となって広がっており、その光景にとっても感動した。



ただし、残念ながらワカン村への道のりは容易ではなく、4WDで急勾配のオフロードを15～20分かけて登る必要がある。道路のすぐ脇は崖で、対向車とすれ違うには広い場所で待つ必要があるくらい道幅も狭い。いつかアクセスしやすくなることを祈るばかりである。

#### オマーンの避暑地、サララ

オマーンを自然観光地を語る上でかかせないのが、サララ(صلالة)である。

サララはオマーン南部のドファール地方にある都市である。この地域では、6月から9月にかけてモンスーンの影響を受け、ハリーフ(خریف)と呼ばれる季節に突入する。この期間は曇りや雨の日が多く、緑が生い茂る。首都マスカットよりも気温が5～10℃ほど低いため、オマーン国内のみならず他のアラブ諸国や欧州からの観光客が避暑地として訪れるほど、人気の観光地である。

日本においては、雨や霧、緑にあふれた景色は珍しいものではなく、特別な感動を覚えることはないかもしれない。しかし、実際に見たサララの豊かな水と緑は首都では見ることのできない光景であるため、サララを薦めるオマーン人たちの気持ちが少し理解できたように思う。

著者は9月中旬のハリーフの時期に、友人とともに訪れた。下記写真はサララ北部にあるジャバル・カラという有名な観光スポットである。ハリーフの時期には、このように美しい緑の自然を満喫することができる。ちなみにここにはサララ空港で借りたSUVで移動したが、



道路は山道も含めて意外と整備されており、初心者でも運転しやすかった。

また、サララは乳香の産地としても知られている。紀元前から乳香貿易の拠点として栄えたスムハラム遺跡や世界遺産であるナチュラル・パーク・オブ・フランキンセンス・ツリー(Natural Park of Frankincense Trees)を訪れ、壮麗な風景や歴史を堪能した。食事は山盛りの米とヤギ肉のミシュカーク(串焼き)、ラクダ肉など、どれも豪快な料理で、毎回満腹になった。

自然、遺跡、美食と、魅力が詰まったサララは、ぜひもう一度訪れたいと感じさせる素晴らしい場所であった。

#### 最後に

正直、2年間のオマーン生活はジェットコースターのように毎日面白いことが起こったわけではなく、淡々と過ごしてきた日々の方が多かった。しかし歴史を感じさせる場所や、自然に癒される場所も多く、その一つ一つが心に残る印象深い経験であり、ただひたすらにオマーンという国を楽しんだ。

またおおらかで適当で、ホスピタリティにあふれるオマーン人たちと、豊かで素晴らしい歴史や自然を感じることができる土地で生活をした経験は、自身の考え方や心を豊かにし、いい意味でも悪い意味でも心が動き刺激的であった。

現在、帰国してから4か月が経った。発展途上で、滞在した2年間の間にもいろいろなものに変化したオマーン。既に懐かしく、戻りたい気持ちもあるが、またさらに変化したこの国を見たいので、もうしばらく経ってから里帰りしたいと思う。

## 2. この一品——私の研究モノ語り

### (1) 研究者の「推し活」：アラビア医学史と墓廟

東京大学大学院総合文化研究科  
地域文化研究専攻博士課程

澤 裕章



近年「推し活」という言葉を見聞きする。他人に勧めたいほどに好きなキャラクターやアイドルを「推し」と呼び、それらを応援する行為を「推し活」と言う。「推し活」には多様な形態があるが、時に「推し」のグッズとともに国内外を周り、それらを並べて写真を撮り、SNSにアップロードする。私自身、特別に推しているアイドルなどはないのだが、研究者であれば、各人が研究対象とする著作や人物は、ある意味では「推し」とも呼べる存在だろう。そして、2025年5月のイラン渡航の際に、私も調査の合間を縫って、「推し」のグッズとともに「推し活」を行ってきた。今回はそこに至るまでの話をしたい。

#### 『アレクサンドリア集成』

私は中世アラビア医学史、特に6世紀にアレクサンドリアで成立した『アレクサンドリア集成』（以下、『集成』）と

呼ばれる文献を研究している。いわば現在の「推し」である。『集成』は6世紀頃にアレクサンドリアで成立したとされる医学教育カリキュラムである。当時のアレクサンドリアでは、2世紀のローマで活躍した医師、ガレノスが体系化した医学理論が熱心に研究されており、彼が著した医学文献を基に医学教育が行なわれていた。しかし、彼の医学書は長大かつ冗長であったため、同地では教育のために内容を簡易に理解できる要約書や注釈書が求められていた。そのような環境下で、『集成』はガレノスの著作を翻案しつつ医学教育を目的に作成された。『集成』の原典はギリシア語で書かれていたが、現在は散逸しているため、その研究にはアラビア語訳を参照する必要がある。アラビア語訳は、9世紀アッバース朝下で著名な翻訳者であったフナイン・イブン・イスハークによって作成されたと考えられている。

現在、私は『集成』に収められたガレノス著『病と症状について』に相当する箇所の校訂版作成と機械学習を用いた翻訳者推定を博士論文として取り組んでいる。これらの作業に必要なのが写本の読解である。『集成』版の『病と症状について』は未だ校訂版が提出されておらず、全文を読み通すには世界各地に散在する写本を調査する必要がある。近年は、写本のデジタル化やアラビア語写本に関するデータベースの整備が進んでいる。しかし、『集成』の写本があるというイランでは、包括的なデータベースは整備されていない。そのため、史料を手に入れるべくイランに渡航することになった。そして、その傍らで「推し活」を行なうことにした。

#### テヘラン大学と書店街

『集成』の写本が収められていると聞き訪ねたテヘラン大学中央図書館は、テヘラン大学の中央キャンパスにある。詳

しい利用方法については紹介文が既に存在する<sup>1</sup>ため、ここでは割愛する。また調査としては『集成』の写本とされたものは、異なるテキストであり、期待外れの結果となってしまったが、こちらも別の紙面で報告を書く予定がある。そのため、ここでは大学前にある書店街での話をしたいと思う。



エンゲラブ広場

イランでは近年アラビア医学史に関する研究や校訂本がいくつか出版されている。テヘラン大学の前を横断するエンゲラブ通りには、数多くの書店が並んでおり、扱う分野も大学などの教科書や専門書、古書など多岐に亘る。私が今回巡っただけでも冊数、種類ともに相当な数になると感じたが、それでも一時に比べると品揃えは悪くなっているらしい。とはいえ、外国の書店を歩くのは、日本で行うのとは違う楽しみがある。

早速、本探し……と行きたいところだが、下準備が必要である。ある程度、ペルシア語を扱えるようにしておきたい。テヘラン市内では若い世代は比較的英語に親しんでいるようで、街中で声をかけてくる若者とは英語で会話することができた。一方、ある程度上の世代だと通りが悪かった。そのため、用件を伝えられる程度にはペルシア語を身に付けておいた方がいいと感じた。私自身、ペルシア語は文献講読のために一通り文法は学んだものの、会話については全くと言っていいほどできず、簡単な挨拶やフレーズが言える程度であった。ある古本屋で店主と会話をした時、ペルシア語がうまく通じず、Google翻訳を使って会話をすることにした。何とか用件は伝えられたものの、「ペルシア語の本が欲しいなら

<sup>1</sup> <https://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/japanese/world-library10>

大使館に行って手伝ってもらえばどうだ」と言われてしまった。不甲斐なさや多少の怒りを覚えた一方で、理屈としてはその通りであり、何と少しでも本屋で会話ができるくらいにはなると誓った。そのおかげか、帰る直前には簡単な会話はできるようになっていた。1週間ほどの期間でも現地で言語を浴びることで上達することを身をもって体験した。

こうして書店街をうろつく内に、とある建物に行きついた。そこには各種専門に応じた書店が集まっていた。入り口近くには工学や法学に関する書店が並んでいたが、奥まで進んでみると、「医学」と書いている書店を見つけた。この店は伝統医学に関する書籍を売る書店らしく、アラビア医学史で重要な作品が並んでいるほか、中国医学に関する書籍も取り揃えていた。欲しい本はいくらでもあるが、荷物のことを考えると全ては買えない。悩んだ挙句、「推し」の著作のペルシア語訳8巻セットを買うことにした。

#### イブン・スィーナーの墓廟

さて、こうして現地の研究書を手に入れた後は、いよいよ『推し活』本番に取り掛かる時が来た。今回の「推し活」は「推し」の墓廟で胸像を手に入れ写真を取ることであった。ここで私の「推し」であるイブン・スィーナーに触れておきたい。イブン・スィーナーは10世紀から11世紀にかけて現在のイランを中心に活動した医学者・哲学者である。彼は幼少期から卓越した才能を発揮し諸学問を修め、王朝で宮廷医を務めながら数々の作品を残した。中でも当時の医学の集大成と評される『医学典範』は翻訳を通じてラテン語圏に伝わり、15世紀頃まで大学の教科書として使われるほどであった。他方、大陸の東側への影響も大きい。『医学典範』はペルシア語圏で翻訳や注釈書が数多く作成された。それらの作品とともに『医学典範』の伝統はインド亜大陸にも到達し、現在では民間医学と融合し「ユーナニ医学」として一定の地位を得ている。イラン渡航に先立って訪れたインドのハイデラバードでは「ユーナニ医学薬局」が街中に点在している。



ユーナニ医学の薬局

これほどに医学史上で功績を残した人物が没したのが、イラン中西部に位置するハマダーンである。古代にはエクパタナと呼ばれたこの町は、山脈沿いにあるため、標高が高く、私の訪れた5月初旬だと夕方になれば上着が必要なほどの気温だった。町はそれほど大きくなく、郊外に空港はあるが、鉄道は通っていない。そのため、テヘラン市内から向かう場合は、バスを利用することになる。私はホテルで聞いた南バスターミナルから高速バスで向かうことにした。所用時間は4時間ほどで、エアコン付きのバスでないと辛い旅になる。

町のバスターミナルに着いたら、墓廟のあるブー・アリー・スィーナー広場まではタクシーで5分ほど移動する。広場の周りは観光地になっていて、彼の名前を冠した建物や彼の著作名が書かれた本型のオブジェなどが置かれていた。そして、広場の中心には彼の墓廟施設がある。この施設は一階部分に博物館があり、その上に彼の墓廟となる塔が建てられている。塔を背景に写真を撮る何枚か撮り、博物館に入った。博物館にはハマダーンで出土した古代の医療器具やイブン・スィーナーの著作の写本、薬草などが展示されていた。面積自体はそれほど大きくはないが、医学史・科学史や古代史に関心があれば十分に楽しめるだろう。

博物館に満足して外に出ると、出入り口の脇にキオスク然としたショップが

あった。店の横にはショーケースが置かれていて、薬草や関連書類が並んでいた。そして、その中にイブン・スィーナーと書かれた胸像があった。しかも金・銀・銅・石膏の四種類！急いで店員に声をかけ、胸像が欲しい旨を伝えると、箱から像を取り出した。しかし、出てきたのは銅と石膏の二つ。「金と銀は？」と聞くと、売り切れていた。石膏だと帰りの飛行機に耐えられるか分からないと判断し、銅の胸像を選んだ。そして墓廟を背景に写真を撮った。これでイランでのプライベートな最大のミッションを達成することができた。なお、現在この胸像は家で一番高い所に飾られている。



イブン・スィーナーの胸像と墓廟

#### さいごに

大量の書籍と「推し」の胸像を抱えて帰国した1か月後、イスラエルによるイランへの攻撃により、海外危険情報のレベルが引き上げられた。現在では一段階下がったものの、渡航は当分の間難しくなった。今回は1週間ほどの滞在で、国内はおろか、テヘラン市内でも観光できていないエリアがある。情勢が安定した暁には再度「推し活」のため、イランを訪れてみたい。

## (2) オマーン・マスカット市で過ごす ラマダン

東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻

国際関係論コース「人間の安全保障」プログラム修士課程2年

有坂 日向子

はじめに：ラマダンの始まりは空港から

2025年3月1日から31日まで、筆者はオマーン・スルタン王国のマスカット市に滞在した。筆者自身はかねてより中東・北アフリカ地域に学術的関心を抱いているが、同時にイスラームを信仰するムスリマでもある。本稿では、宗教的に特別な時期であるラマダン月において、中東における一時的な滞在者として体験した出来事を、学術的視点とムスリマとしての視座という二重のポジションから記録・分析することを試みる。

出国に先立ち、まず査証の取得が必要であった。日本国籍者がオマーンに入国する際の査証免除期間は最大14日間と短いため、事前に30日間有効のTourist Visit Visa（観光査証）をオンラインで取得した。マスカット空港の入国審査では、一時訪問者レーンではなく居住者レーンに案内されそうになった。これは、おそらく筆者がヒジャブを着用していたためであろう。入国管理の場は、国家の「他者」への認識がもっとも可視化される空間のひとつであると思うが、オマーンにおいてはそのまなざしは穏やかで、「ゆったり」「のんびり」という形容がふさわしいだろう。

「アラブ人じゃないのか?」「本当に日本人? 一重じゃないけれど。」などの問いは、欧米諸国や日本での入国時にはまず投げかけられないものであり、むしろ新鮮な経験であった。なお、筆者は日本とイギリスのミックスである。さらに、「ラマダンはサウジの時間に合わせるのか?」といった宗教実践に関する質問も飛び出し、自身がムスリマとして見られる体験でもあった。

入国後、「ジャザーカッラー jazaka allah」<sup>1</sup>と挨拶をして出口へ向かい、夫に連絡を取ろうとしたが、空港 Wi-Fi の

利用にはオマーン国内の携帯電話番号が必要であった。現地の携帯番号を持たなかったため、近くにいたインド人スタッフに依頼して、彼の携帯でSMS 認証を通してもらった。オマーンではVPNの使用が法律で禁止されていると聞いていたため、サイバーセキュリティに厳しいイメージがあったが、空港 Wi-Fi のセキュリティは緩やかであったことに驚かされた。

迎えを待つあいだ、空港内の祈祷室を訪れた。中にはマレーシア人と思しき女性職員が一人だけおり、筆者が日本から来たことを伝えると、満面の笑顔で「オマーンによろこ」と迎えてくれた。この一言が、オマーンで過ごす日々の始まりを知らせてくれたように感じられた。同時に、入国後すぐに東南アジアや南アジア出身の職員に会ったことで、オマーンの人口構造や社会的多層性が直感的に理解できる場面でもあった。

### 女性としての体験

日常生活における女性としての安全性について事前に触れておきたい。筆者がマスカットで過ごしたのは1か月間という比較的短い滞在期間であったが、そのあいだ、昼夜を問わず差別的あるいは性的な言動を受けることは一度もなかった。もちろん、ラマダンという神聖な期間において、信仰心の高まりとともに人々の言動がより意識されていた可能性は否定できない。それを差し引いても、筆者は日本国内での生活と比べても、むしろ安心感のある日々を送っていたと感じている。

オマーンでは都市部にも鉄道や地下鉄といった公共交通機関が整備されており、移動手段としては車移動が主流である。そのため、筆者は滞在中、配車アプリ「Otaxi」を利用することが多かった。同アプリでは「女性専用タクシー」を選択することができ、実際に何度か利用してみたが、料金がやや高めに設定されて

いる点を除けば、サービスや運転手の対応、マナーといった点で通常のタクシーとの差は特に感じられなかった。これは、女性という属性によって特別な「保護」を必要とするわけではなく、社会全体として一定の節度が共有されていたことの表れとも言えるのではないかと

### 都市の風景に見る分業と共存

町中の小さなスーパーでも、大規模なショッピングモール内のチェーン系スーパーでも、スタッフの大半は南インド系の出自を持つ人々であった。彼らは業務中、同僚同士ではヒンディー語やウルドゥー語で談笑しながらも、客に対しては英語で接客を行っていた。言語の使い分けは、彼らの間にある文化的共同体の結びつきと、職業上の期待とのあいだに引かれた明確な境界線を象徴していた。

また、大型スーパーのレジにはオマーン人と見られる男女が座り、商品のスキャン作業を担っていた。一方で、スキャンされた商品を袋に詰めるのは、決まって南インド系のスタッフであった。同じ店舗内という限定された空間においてすら、職務の分担が出身地によって明瞭に線引きされており、その配置の中に、見えにくいヒエラルキーの構造が埋め込まれていることが直感的に理解された。このような場面は一見すると機能的分業に過ぎないようにも見えるが、それが恒常的に繰り返されることで、国籍や出自による社会的階層の再生産が日常実践として温存されていることを示しているように思われた。

### 祈りの場にひろく多様性

#### ——モスクという交差点

タラーウィーフ礼拝 tarawih<sup>2</sup>には、月経期間を除き每晚欠かさず参加した。モスクは単なる礼拝の空間ではなく、その地域のコミュニティーが日常的に交わる場でもある。したがって、同じ場所に通い続けることで、徐々に顔見知りの女

1 日常的に使われる「ありがとう/シュ克蘭 shukran」に代わる、より宗教的な祝福の意味を含む表現であり、「アッラーがあなたに恵みをもたらしてくれますように」と願うムスリム同士の挨拶である。

2 ムスリムにとって義務である5回目のお祈りの後に続けて行われる、ラマダン月の任意礼拝。通常の礼拝よりも回数と時間が長い。

性たちが増え、筆者も一時的な「よそ者」から空間の一部として迎え入れられるような感覚を覚えるようになった。

滞在していたアパート近くのハイユ・アル＝バイダーウ礼拝堂 Jami' Hayy al-Bayda<sup>3</sup> では、礼拝者の多くがオマーン人であり、礼拝前後の会話も主にアラビア語で交わされていた。このモスクの特徴として、オマーンでは多数派を占めるイバード派の礼拝スタイルが見られた点が挙げられる。たとえば、立位から拝礼 ruku<sup>3</sup> に入る際の動作において、スンナ派の一部（シャーフイー派など）では両手を耳の横に上げてから屈むのに対し、イバード派ではその動作を省略し、直接拝礼に移行していた。宗派間の教義上の差異というよりも、身体の所作による宗教実践の違いを認識した瞬間でもあった。



Jami' Hayy al-Bayda<sup>3</sup>

一方で、近隣にある別の礼拝所であるマスジド・アル＝ジャリール Masjid al-Jalil では、バングラデシュ、マレーシア、パキスタン系のムスリムたちが多く集まっていた。印象的だったのは、タラーウィーフ礼拝においてイマームが暗唱するクルアーンの章 surah が比較的長く、1 時間半近くをかけて 8 回のラクア rak'ah<sup>3</sup> が行われていた点である。イスラームの教義的には朗誦する章の長短に意味的優劣はないとされるが、どの章を、どのようなリズムで暗唱するかという選択が、それぞれのコミュニティの感受性や慣習と密接に結びついていることがうかがえた。2 つのモスクを比較しただけでも、宗派・民族・言語・実践方法といった多層的な差異が存在していることが明らかであった。

### 宗教的空間における女性

ラマダーン月特有のタラーウィーフ礼拝に参加する中で、女性たちのあいだにも明確な年功序列のような非言語的秩序が存在することに気づかされた。礼拝前、年配の女性たちは一番前の列にまとまって座り、時にはプラスチック製の椅子を並べて場所を確保していた。誰かが礼拝の途中で退出すると、その空いたスペースに若い女性を促して移動させるのも、決まって年長の女性であった。形式的なリーダーがいるわけではないが、秩序や伝統を維持しようとする意志が自然に機能していた。

ある晩、テレビの通信不良が原因でイマームの声が女性の祈禱スペースに届かなくなった際には、しばしのざわめきの後に最前列の年配女性が立ち上がり、イマームの代わりに礼拝の進行を引き継いだ。後に聞いたところでは、彼女はイマームの妻で、音声で遮断された際には代替的に先導することがあるという。モスクでの集団礼拝は、男性のイマームが先導するという決まりがある空間においても、状況次第では女性コミュニティの判断と信頼に基づき、女性がイニシアティブを取る光景が確かに存在していた。

また、トルコ建築様式の礼拝所であるサイド・ビン・タイムール・モスク Said bin Taymur Mosque では、礼拝中に誰かの携帯電話が鳴った際には、年



Said bin Taymur Mosque

配女性がすぐに注意を促し、場の静けさを取り戻す場面もあった。声を荒げることなく、しかしはっきりとした口調と仕草で秩序を回復するそのふるまいに、宗教空間における規範意識が凝縮されていたように思う。こうした体験を通じて筆者は、モスクという宗教的空間における女性の存在が単なる「信徒」にとどまらず、秩序の安定とコミュニティを支える担い手であると改めて感じた。

### 知の風景に触れる

滞在中、筆者はマスカット市内に点在するいくつかの書店を訪れた。そのひとつが、al-Khuwayr 地区南部の al-Kulliyya Street 沿いにある Bahrain Books である。外観は質素で控えめながら、イスラーム関連書籍、児童用の英語の本やアラビア語の絵本、オマーンの歴史、特にタンザニアとの歴史的繋がりを強調するような書籍など多様なジャンルの本が並んでいた。また、大型モール内にも一般的な書店が併設されており、そこには英語圏ベストセラーの翻訳本や児童用の絵本、オマーンの文化を紹介する観光向け書籍が多く見られた。しかしながら、学術書や専門書の翻訳本に関しては情報が古く、出版年も 2010 年代のものが多かった。これは、学問的知識のアップデートに対する需要の限界、あるいは偏った出版流通の現状を反映している可能性がある。



Bahrain Books

3 立礼、屈礼、平伏礼を含む礼拝の単位。

このような書店体験は、礼拝や街歩きとは異なるかたちで、オマーン社会の特徴を読み解く手がかりとなった。そしてそれは、筆者自身の視座の在り方をも問い直す機会となった。ムスリマとして、また国外から来た者として共同体に入り

込みつつ、どこかで観察者としての距離を保ち続けるという二重の視点でオマーンの一部を観察することができた。 Ramadan月のマスカット滞在は、宗教実践に身を委ねながらも、常に複数の位置性とまなざしを行き来する経験であった。労働、言語、秩序、知識などをめぐる観察は、今後の筆者の研究においても単一ではなく、重層的な実践として社会を捉える感性を鍛える糧となることを願う。

### 3. 駒場中東セミナー開催報告

(1) 2025年4月11日(金)

シンポジウム『イスラーム法研究入門』

刊行記念：

書評会『イスラーム法研究入門』

共催：東京大学人文社会系研究科イスラーム学研究室、東京大学中東地域研究センター(UTCMES)

柳橋博之監修(2025)『イスラーム法研究入門』成文堂は、東京大学イスラーム学研究室で長年にわたり教鞭を執った柳橋博之の退職記念論集である。しかし、同種の書籍の慣例に反し、学生にも読みやすい、ハンドブック型の書籍となっていることが特徴的である。本書の構成は、イスラーム法研究に関する部分(第1～3章)と、歴史研究の紹介(第4章)に分けることができる。第1章では東洋学などイスラーム法研究の欧米圏における歴史が書かれ、第2章では学派ごとの法学研究史が書かれている。第3章はハディース研究についての章である。

本会ではまず UTCMES 助教の木村風雅が第1～3章の書評を担当し、第1章では、学派、師弟関係、地域、法学テキストという、これまでのイスラーム法研究で行われてきた区切りが紹介されているのに対して、第2章では、学派の中での権威的な学説の発生過程と、王朝・国家でそれらが公式化された過程が書かれていること、第3章では、イスラーム世界における理解が取り上げられ、英語圏での東洋学・イスラーム研究や、現地語の研究との付き合い方についての指針が述べられていることが特徴的だと指

摘した。

第4章の書評は早稲田大学の五十嵐大介が担当した。章全体の位置づけは、イスラーム法の社会での適用を示すものである。第1節では、史料の制約から近代を対象にする各論に対して、三浦徹による、地域・時代の幅を広くとった総論が入る。第2節で大河原知樹は、膨大な先行研究のあるオスマン朝期のトルコ・アラブ諸国・バルカン諸国の法廷文書全体を概観し、各国の所蔵資料・最新の情報を提示している。第3節では磯貝健一が、ロシア帝政期中央アジアでの法廷文書へのアクセス過程、裁判状況の復元などを述べている。第4節では阿部尚史が本書唯一のシーア派に関する研究を展開し、カージャー朝期の法廷文書について様式を記している。第5節を執筆した佐藤健太郎は、一つの皮紙に数十年かけて書かれたモロッコの不動産の権利に関する文書を、先行研究がほとんどない中で解読した。1冊を通すと、法廷文書に法学派がどう関係しているのか、法学上の学説・議論が文書に反映されているのかを考えるために重要な構成になっている一方、両研究の接続は今後の課題として開かれている。

次に、編集者・執筆者による紹介が行



われた。それぞれ、各自の仕事の意図とともに、柳橋の教育を受けた思い出、そのテーマを扱うことになったきっかけなどの裏話を提供し、会場は盛況となった。

(東京大学教養学部 芝田和樹)

(2) 2025年5月11日(日)

イエメン特別集会1「イエメン：10年の混乱は何を生み出したのか」

2025年7月6日(日)

イエメン特別集会2「イエメン内戦の傍観者？ ハド라마ウトほか東部諸地域の歴史的・今日的ダイナミクス」

共催：立命館大学中東・イスラーム研究センター(CMEIS)、現代中東政治研究ネットワーク(CMEPS-J)、JICA(国際協力機構)「紛争における開発支援」研究会、JSPS 科研費(JP23K00887)、東京大学中東地域研究センター(UTCMES)

立命館大学中東・イスラーム研究センターとの共催で、5/11(日)と7/6(日)にイエメン特別集会が開催された。第1回は「イエメン：10年の混乱は何を生み出したのか」と題し、2015年の内戦勃発から10年を機に混迷のイエメン情勢の形成と複雑化の過程が報告された。第2回は「イエメン内戦の傍観者？ ハド라마ウトほか東部諸地域の歴史的・今日的ダイナミクス」と題し、これまで語られることの少なかった同地域の歴史的な展開と内戦勃発後の勢力関係について報告された。

第1回では、まず JICA の川嶋淳司が、内戦開始までの10年を省みた。2009年に「アラビア半島のアル・カーイダ」(AQAP)が結成されたところから始め、イエメン領土内でのテロ掃討作戦に協力する主体をアメリカが望んでいたこと

や、少し時代を遡ってフーシ派と南部分離派という主体の形成を述べた。アラブの春でサーレハ大統領が合意と交渉によって退陣し、旧北イエメン出身の彼の下で副大統領を務めていた旧南イエメン出身のハーディーが大統領に就任し、政権移行過程の確認と憲法の骨格作成のために国民対話会議が組織されたが、成果が見えない移行政権に対する不満に乗じたフーシ派がサナアを占拠し、それに対して2015年にサウジアラビア等有志連合が空爆を開始するという流れを紹介した。

次に防衛省防衛研究所の吉田智聡が、イエメン内戦がなぜ政治的解決も軍事的決着もせず10年にわたり続いてきたか、また10年の内戦を経て各アクターはどのように変容したかという問いを考察した。イエメン内戦は、開戦から2022年4月の停戦合意までの、国内の軍事衝突やサウジアラビア・UAEに対する航空攻撃の烈度が高かった第1段階、停戦合意から2023年10月にガザ紛争が勃発するまでの軍事衝突の烈度が低下した第2段階、ガザ紛争とイエメン内戦が接合するようになった第3段階に分けられる。第1段階ではともにIRG（国際承認政府）と対立していた南部移行会議とサーレハ派の国民抵抗軍が、前者は2019年、後者は2022年に、大統領指導評議会を中心とするIRGに合流するなど、国内主体の変化が見られる。

3人目に発表した神奈川大学の樋谷恒

孝は、UNDP 平和事業支援チームのリーダーとしてサナアに滞在していた経験をもとに、イエメン紛争での国連の役割を論じた。国連には国際規範を形成する場、フォーラムの場、実践する組織としての面があり、それぞれ法的拘束力を持つ安保理決議の読解、各国代表のスピーチに対するテキスト分析、平和構築に関する現場の事例紹介によって論じられた。

全体討論では、大東文化大学の松本弘が、諸外国からの経済協力を取り付けるために不安定要素を温存するという脆弱国家支援論に基づいた説明を行い、日本エネルギー経済研究所の堀抜功二が、自身の専門とする湾岸諸国からイエメンへの軍事介入の様相と、内戦に起因する物流・エネルギー輸出コストの増大を説明した。

つづく第2回では慶應義塾大学の新井和広が19世紀に小王国が林立していた時代からの歴史を、古地図を交えて概観した。イエメン東部のハドラマウト県とマフラ県は、フーシ派支配地域やアデンと一定の距離をとっており比較的治安が安定している。旧北イエメンとは宗派・文化、支配王朝の違いがあるだけでなく、アデン周辺地域が南アラビア連邦として独立した後もイギリスの保護領であり続けることを選択するなど、国内他地域とは様々な相違点がある。

ハドラマウトは東南アジアなどインド洋沿岸地域に移民を送り出しており、インドで蓄財したハドラミーの帰還者からは王朝の建国者が出るほどであった。現

在も東南アジアのムスリムが留学に来ることなどの人的つながりがある。

続いて吉田智聡が、東部諸地域が内戦で果たしている役割と東西の勢力図について述べた。ハドラマウトはフーシ派でも南部分離主義勢力でもなくIRGが支配しており、かつ戦闘が及んでいない数少ない地域の一つであるが、そのことは内戦と無関係であることを意味しない。内戦前にハドラマウト自治主義が萌芽し、UAEがAQAPからムカッラーを解放してからは「ハドラマウト精鋭隊」が設立され南部移行会議と連携した。南部移行会議はアデン周辺からハドラマウトへの東進を行っている。一方のサウジアラビアはアリーミー政権と連携して「ハドラマウト国民会議」を設立し、自治主義に源流を持つ部族同盟も創設され県内での競争が複雑化している。その東のマフラ県では武器密輸経路であると同時にオマーンの勢力圏であり、サラフ主義や密輸に関するサウジアラビアとの方針の違いが顕在化する地域でもある。

全体討論では、宇都宮大学の松尾昌樹が、紛争の要因を恒常的効果と変動的効果に分ける見方を提供し、しばしば紛争の原因とされる後者だけでなく前者にも着目することを主張したうえで、非国家主体間の紛争が多い他地域と比べ主権国家間の紛争が急増している中東に固有の状況として考えられることを提示した。

(東京大学教養学部 芝田和樹)

## 4. バフワーン文庫便り

バフワーン文庫特任研究員 倉澤 理

前号のシリア関連の記事で、2024年に逝去したシリア人の恩師との思い出を綴らせていただきました。

落語家や芸人が師匠に金魚のフンの如くくっついて歩くように、大学に先生がいらっしゃる時間帯はおろか、日曜日の

夕方は吉祥寺の外国人教員宿舎の先生の家にお邪魔をし、千葉の自宅に帰宅するのは深夜という、夢のようなアラビア語漬けの生活を送っていました。

先生と一緒に作った、通称「農民サラダ」。卵とジャガイモを一緒に茹でて、殻と皮を剥いて、すりつぶし、玉ねぎのざく切りを混ぜて、クミン（だったか？）

などで整えた、シンプルな一品。

そして先生自らが淹れてくれたコーヒー。長い持ち手のついた小さなポットに挽いたコーヒーを入れ、水を注いだ後、幾度も沸騰させて、仕上げはカルダモン（だったか？）などをいれていたと思います。作り方をメモしなかったのが悔やまれます。

中東地域に興味を持たれた皆さんに、こうした「生の文化」を感じていただきたく、今回は文庫が所蔵する、中東地域の

食文化関連の本をご紹介します。

○現地で学んだパレスチナ料理レシピ集 / 菅瀬晶子著

(44 頁、[田浪亜央江：田村幸恵：役重善洋]、[2025.5])

※東大内では、バフワーン文庫のみ所蔵 (2025 年 7 月時点)

※バフワーン文庫所蔵のものは寄贈によるもの。

今年 (2025 年) 3 月に逝去した著者がかつて連載したものに、絶筆の原稿などを加え、とりまとめたもの。

○トルコ料理の誘惑：私を虜にした食と文化 / 井藤聖子著

(197 頁、現代企画室、2019.10)

※東大内では、バフワーン文庫のみ所蔵 (2025 年 7 月時点)。

○フムス：豆のペーストレシピ 70 / 朝日新聞出版編著

(95 頁、朝日新聞出版、2016.8)

※東大内では、バフワーン文庫のみ所蔵 (2025 年 7 月時点)

○アラジンとお菓子：『アラビアンナイト』から / ムナ・サルーム、レイラ・サルーム・エリアス著；今川香代子訳

(146 頁、東洋出版、2017.12)

※東大内では、バフワーン文庫のみ所蔵 (2025 年 7 月時点)

○アラブのなりわい生態系 2：ナツメヤシ / 石山俊、縄田浩志編

(315、iii 頁、臨川書店、2013.12)

※東大内では、バフワーン文庫の他、駒場図書館、本郷・総合図書館、弥生・農学生命科学図書館所蔵 (2025 年 7 月時点)

「コラム 3 食べ物としてのナツメヤシ」(石山俊著) 他収録。

○魚食から文化を知る：ユダヤ教、キリスト教、イスラム文化と日本 /

平川敬治著

(184 頁、鳥影社、2020.12 ※文庫所蔵は 2021 年 3 月の初版第 2 刷)

※東大内では、バフワーン文庫の他、本郷・総合図書館、弥生・農学生命科学図書館所蔵 (2025 年 7 月時点) 「西アジア世界の魚文化—キリスト教誕生の地の魚と漁」収録。

○世界珍食紀行 / 山田七絵編

(245 頁、文藝春秋、2022.7)

※東大内では、バフワーン文庫の他、本郷・総合図書館所蔵 (2025 年 7 月時点)

「クウェート 国民食マチブースと羊肉のはなし」(石黒大岳著) 他収録。

バフワーン文庫は学術的な研究書のみならず、こうした食を含めた文化全般に関する本も積極的に蒐集しています。

●UTCMEs スタッフ紹介 (2025 年 9 月 30 日現在)

〈スタッフ〉

高橋 英海 (センター長、兼務教授)

荻谷 康太 (兼務准教授)

鈴木 啓之 (特任准教授)

倉澤 理 (バフワーン文庫・特任研究員)

大塚 修 (兼務准教授)

森元 誠二 (客員教授)

木村 風雅 (特任助教)

瀬口 美加 (事務補佐員)

〈UTCMEs 運営委員〉

高橋 英海 (委員長、総合文化研究科教授)

荻谷 康太 (総合文化研究科准教授)

清水 剛 (総合文化研究科教授・副研究科長)

黛 秋津 (総合文化研究科教授)

大塚 修 (総合文化研究科准教授)

森井 裕一 (総合文化研究科教授・グローバル地域研究機構長)

四本 裕子 (総合文化研究科教授)

菊地 達也 (人文社会系研究科教授)

〈スルタン・カブース・グローバル中東寄付講座運営委員会〉

高橋 英海 (委員長)

大塚 修

荻谷 康太

森井 裕一

清水 剛

四本 裕子

黛 秋津

●発行者情報 UTCMEs ニュースレター VOL.27 2025年9月30日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター(スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座)  
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 TEL：03-5465-7724 FAX：03-5454-6441  
<https://park.its.u-tokyo.ac.jp/UTCMEs/>

編集：木村 風雅

印刷：株式会社コムラ 〒501-2517 岐阜県岐阜市三輪ぶりとびあ 3 TEL：058-229-5858 FAX：058-229-6001